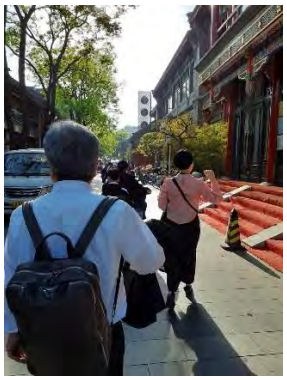
北京市内　移動中の写真　24～25 日

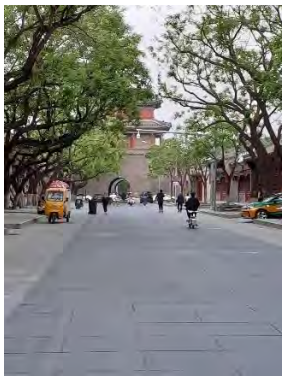
↑マイクロバス車内からの撮影

北京市では、ナンバープレートの交付制限がある。（ガソリン車 10 万台/年、新エネルギー車約２万台/年）。 ガソリン車の場合は抽選制。年６回抽選が行われ、当選するとナンバープレートが交付される。
ナンバープレートの色分けをしている。
電気自動車は緑　ICE（ハイブリッド車含む）は青
自動車の保有台数による渋滞や大気汚染を緩和するために、ナンバープレートの末尾数字による交通規制の施策を実施している。

緑豊かな街並み

歩道は木陰





↑マイクロバス車内からの撮影

↑徒歩での移動中の撮影

- 天安門広場周辺　（以下、徒歩移動中の撮影）

写真撮影は問題ない。天安門に入る場合は、持ち物検査がある。　広場は広大。

・付属中学校の門

・美術館が街中にある

小学校、中学校、美術館などの教育施設がわりと集中している

・レンタサイクル数種
業者はリヤカーや軽トラで自転車を
回収し、山積み状態で移動していた。

・スクーターは電動が多い。音が静か。
小学生の子どものお迎えのために多く
の保護者が学校の前に集まっていた。

・車道の樹木を保護している
標識で、車はよけるように指示している。

・街路樹の管理がされている
樹木の根本から 1mほど石灰のようなもの
を塗り、虫よけと日焼け防止をしている。

４月 26 日

侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館視察　　14：20～17：00

侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館秘書：芦 鵬氏

同行者：華語智庫副秘書長：夏 孝駒氏、人民日報海外ネット 遼寧大学日本研究センター評論家客員研究員：陳 洋氏

侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館：中華人民共和国の博物館であり、1937 年の南京事件を追悼する施設。日本では南京大虐殺記念館と呼ばれている。中国共産党により第 1 次愛国主義教育模範基地に指定されている。2014 年から、南京大虐殺犠牲者国家追悼の指定場所とされている。

私一人が一日早く帰国するため、華語智庫の方がサポートしてくださり、団の皆さんとは別に記念館の視察が実現した。平日だったので、休日の身動きとれないほどの来館者数とは違い、記念館の説明を丁寧に受けることができた。

入口の階段を降りると、下まで続く側面の棚には公文書がぎっしり納められている。１万巻ほどある公文書は、南京大虐殺の死難者、生存者、加害者、第三者証人に関する内容。

両側の壁には、1200 人ほどの生存者の顔写真をプレートにして展示してある。中央の円形に並んだ元城壁の煉瓦を使用したスポットライト 30 個（死難者 300,000 を照らす）のところの内側にたくさんの遺骨がある。まだ見つかっていない方の遺骨が埋まっているとのこと。（遺骨のみ撮影禁止）

←無差別の空爆が数ヶ月続いた当時の写真をもとに、大空爆後の南京街の様子を復元している。

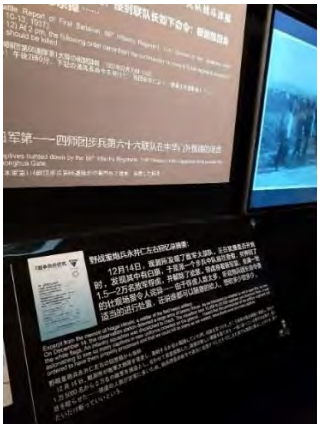
↑日本軍が南京に侵攻

↑1937 年 8 月 13 日
八・一三事件が勃発
上海市街地は戦火に
包まれた。

日本軍は上海を占領した後も、中国侵略戦争を拡大するため、南京への侵攻を続け、金山、嘉興、蘇州、無錫、湖州、常州、広徳、江陰、鎮江、蕪湖などを次々に占領し、焼き払った。無謀な殺人、略奪をした。

軍は「捕虜の完全排除」政策を実施
1937 年 12 月 13 日の日本第 16 師団長中島金剛の日記からの抜粋: 我々は基本的に捕虜は取らないつもりだったので…佐々木軍だけで 15,000 人が殺された。

←日本陸軍第 16 歩兵師団第 38 連隊に捕らえられた中国兵（写真下）



野戦重砲兵永井均の回想録の要約：12 月 14 日、監視所は敵の大部隊を発見し、発砲するか否か躊躇していた時、その中に白旗が掲げられていたため、歩兵中隊を派遣して総勢 15,000 人から 20,000 人の敵捕虜を護送した。武装解除された。新しい軍服を着た捕虜が地面を埋め尽くす壮観な光景には驚きました…捕虜の人数が非常に多いため、砲兵団長の命令で適当に処理すべしだそうだ。斬りたいだけ斬っていいという。

日本軍によって略奪された仏像や古代の石碑。
日本軍が押収した書籍、新聞、定期刊行物
南京書籍強盗に参加。戦後、彼は日本軍が南京で計 88 万冊の書籍、定期刊行物、文書を略奪したが、これは当時日本最大の図書館であった東京の上野帝国地図の蔵書 5 万冊を上回ったという記事を書いた。彼らはまた、「東アジアの仏教の普及」を口実に、唐僧の遺物の一部を日本に盗み、埼玉郡の慈恩寺に隠した。

ジョン・ラーベ氏

南京安全区国際委員長会長。難民にとって「現世菩薩」のような存在。
600 人以上の難民を受け入れた南京のラーベ・ハウス
←自宅内の防空壕の写真。この防空壕には多くの難民が避難した。
戦時中ラーベ氏が日記を記している姿→
１９３７年９月から 1938 年２月までの日記は、虐殺事件の写真・手紙・文書のコピー・新聞記事などの取材が収められた貴重な内容が残されている。

←ミニー・ヴォートリン：女性と子どもの「守護聖人」
1937 年 12 月に日本軍が南京を攻撃したとき、ヴォートリンは金陵女子文理学院の学部長だった。彼女は寮長の程瑞芳と総務部長の陳秋蘭とともに女性と子どもにキャンパスを開放するための特別委員会を結成し、女性と児童の避難所とした。ピーク時の避難者は 1 万人を超えた。彼女はしばしば早朝から夜遅くまで忙しく、日本軍の難民シェルターへの侵入を阻止するために奮闘。難民から「生きた仏陀」「守護聖人」と呼ばれた。

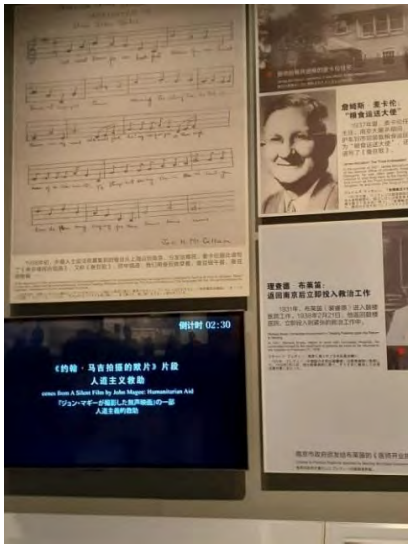
ヴォートリン女史の有能な助手、程瑞芳の『程瑞芳日記』（原本は中国第二史料館所蔵）程さんは、南京大虐殺期間中、ビォートリンに協力して金陵女子文理学院所の難民収容所を管理した。
1937 年 12 月 8 日から 1938 年 3 月 1 日にかけて、日本軍の焼･殺･姦･略の諸暴行とその時の思いを記した日記は、他の外国人の日記と裏付け合えるものとなった。2015 年 10 月に、国連教育科学文化機関により「世界の記憶リスト」に登録された。

【生存者の記憶】日本軍による性的残虐行為の犠牲者
1938 年 1 月 2 日、2 人の日本兵が女性の頭を切り落とそうとした。額はつながっていなかった。
写真は病院で治療を受けている女性。（写真上）
日本軍は老若男女を問わず女性を恣意的に強姦し、妊婦も容赦しなかった。極東国際軍事裁判の判決によると、日本軍が南京を占領してから最初１か月以内に、城内で２万件に近い強姦事件が発生した。

1938 年 2 月 25 日 25 の難民保護所の所長と 9 人の地区長がラーベの人道的救援に感謝の意を表明することを決議した。
1937 年 12 月 23 日のラーベの日記
「近所の靴屋が古い革靴を履き替え、私の望遠鏡用の革ケースを作ってくれました。私は彼に 10 元を支払いましたが、彼は黙ってそのお金を私の財布に戻しました」靴屋はラーベの使用人に、命を救ってくれたラーベさんに感謝の気持ちを伝えるために「どんなことがあってもお金は受け取れない」と告げた。
ラーベの隣人の中に靴職人がいた。日本軍機が南京を空襲した後、彼は一家全員をつれ、何度もラーベの家の敷地内にある防空壕に来た。
2013 年南京市政府がベルリンに建てたラーベの墓石（写真）

1938 年 3 月 6 日のアメリカ人医師ウィルソンの日記からの抜粋: 2 日前、ある老人が治療を求めて莫陵関鎮から病院にやって来ました…日本兵は毎日少女や家畜を求めて彼のところにやって来ました。
2 月 13 日、数名の日本兵が彼の無能さに激怒し、彼を縛り上げて地上約 3 フィートの高さに吊るし、服を解き下から火をつけて焼いた。
←女性が病院で手当てを受ける様子の動画が流されている。

朝日新聞　2008 年(平成 20 年)9 月 14 日 日曜日
写真が語る戦争　謎　ひとつ解けた
合成説「成り立たぬ」一枚　（読者所蔵写真）
2008 年 9 月、日本の神戸在住の吉本栄三氏は、　南京事件の際に日本軍が中国人犠牲者を生き埋めにする同じ場面を異なる角度から写した 3 枚の写真を提供し、そのニュースが朝日新聞に掲載された。



←ジャメス・マッカラム氏（米人宣教師）と楽譜
1938 年初頭、南京滞在の外国人は集めたソラマメを上海から南京まで運び、人道的救援難民に配布することに成功した。マッカラム氏はこれに基づいて南京難民合唱曲「ソラマメの歌」を作曲した。人々にやさしく「食糧運輸大使」と呼ばれ、食糧を送るために郊外を運転する姿がよく見られた。
1938 年 1 月 9 日のマッカラムの日記より「難民キャンプの入口に新聞記者が数名やって来て、ケーキ、りんごを配り、わずかな硬貨を難民に手渡して、この場面を映画撮影していた。こうしている間にも、かなりの数の兵士が裏の塀をよじ登り、構内に侵入して 10 名ほどの婦人を強姦したが、こちらの写真は一枚も撮らなかった」
↑ジョン・マギーが撮影した無声映画の一部「人道支援」からのシーンが上映されている。

大虐殺の記録者ジョン・G・マギー氏
南京大虐殺期間中、米人牧師のマギー氏が 16 ミリの撮影機を手に、密かに日本軍暴行を撮影していた。唯一の現存動画。
2002 年１０月に、ジョン・マギー氏の息子のダビデ・マギー氏が、当時使用された撮影機とフィルムを記念館に寄贈した。
2015 年 10 月国連教育科学文化機構に「世界の記憶リスト」に登録された。

1937 年 12 月 15 日「シカゴ デイリーニュース」は、「虐殺の物語―日本軍は数千人を殺害」と題した報告書を掲載した。
「南京を離れるとき、私たちが見た最後の光景は、遺体が高所にあった川近くの城壁で 300 人の中国人が秩序正しく処刑される光景だった。これは、ここ数日の南京の狂気の光景を最も典型的に表している。死体は、膝の高さまで達していた。」
『ニューヨーク・タイムズ』の記者ダーディン。（写真下）
ニューヨーク・タイムズ紙は 1937 年 12 月 18 日、「捕虜は全員虐殺された。日本軍は南京でテロを引き起こし、民間人も殺された」と題するダーディンの記事を掲載した。

←在中国のマンチェスター・ガーディアン紙のジャーナリスト　ハロルド・ジョン・ティンパレー氏
1938 年、南京の外国人の記録をもとに『戦争の意味は何か 中国における日本軍の暴行」いう本を書いた。
1938 年 1 月 21 日ルーズベルト米大統領はコーデル・ハル国務長官に宛てた手紙の中で、「日本軍による略奪行為を阻止する力が日本政府には既にないことを証明するため、この電報か類似の電報を公開することを考慮すべきだと感じている･･･」と述べた。（写真２段目）

1938 年 1 月 30 日、ソ連の新聞プラウダは「南京では日本軍の残虐行為による死体が 1 か月もしないうちに街路に散乱していた」と題する記事を掲載した。（写真３段目）
1938 年 5 月 16 日『ライフ』マギーが撮影したフィルムから切り取った 10 枚の写真（右下）
1943 年米国出版『ウイークリー』が日本における暴行を掲載。（写真右上）

南京で日本軍が掲示した欺瞞的なポスターと漫画（左）

1938 年 1 月 19 日発行の日本の『中国戦線写真』（第 30 巻第 3 号）には、「南京陥落後一週間」と題された一連の写真が掲載され、陥落後の南京は「平和な」風景として伝えられた。

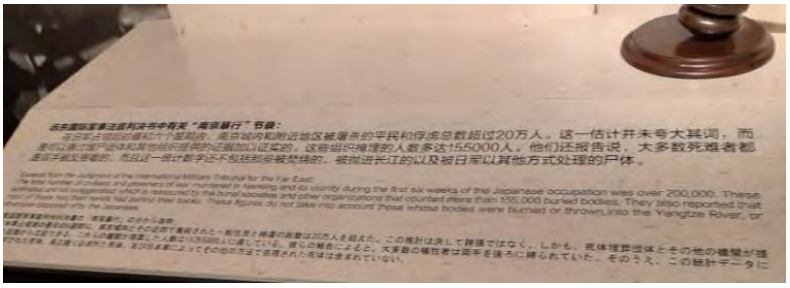
新聞記事や日記、写真、
冊子などの資料が展示
されている。

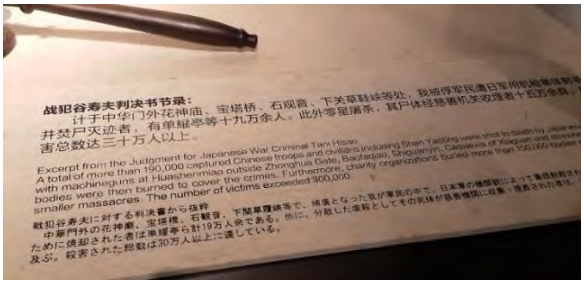
1937 年９月９日、陸軍省報道検閲係制定に基づく厳しい陸軍の検閲制度による発表禁止（不許可）にした南京大虐殺などの不都合な写真を、大阪毎日新聞社は保存している。（←左上）
1937 年 12 月 14 日、日本軍とともに南京城に入った『東京毎日新聞』と『大阪毎日新聞』の特派記者団が集合写真を撮った。（←右上）
1938 年４月１日、日本の『世界画報』に掲載された「南京の春の風景」の写真。「平和」を装っている。（←右２段目）
『不許可写真』に掲載された写真(一部)。（←下）

一部の写真は同社が
1998 年に発行した
『不許可写真』
に掲載された。→

※「中国第二歴史檔案（とうあん）館」（史料館）で、当時の広田外相が日本大使館に送った電報や南京大虐殺後の惨状を目撃した黄鈺涵の報告書が発見されている。これらの資料の大部分は、現場体験者が自ら書いたり、話したりしたもので、中には加害者たる日本人兵士の日記や手記、告白書があり、写真は日本軍自らが撮ったものもあり、これらの資料は南京大虐殺の真相を生々しく語っている。

1947 年春、東京裁判に参加した一部の中国人兵士の集合写真（←左上）
極東国際軍事裁判所裁判官（1946～1948 年）
　梅汝璈氏
「私は復興主義者ではないし、日本の軍国主義によって負った血の恩義を日本人の帳簿に書き記すつもりはない。しかし、過去の苦難を忘れれば、将来、災いが起こる可能性があると私は考えています。」
梅氏の（←右）写真は、アメリカ国家公文書館所蔵
東京裁判に参加した中国人職員（一部）紹介（←左下）

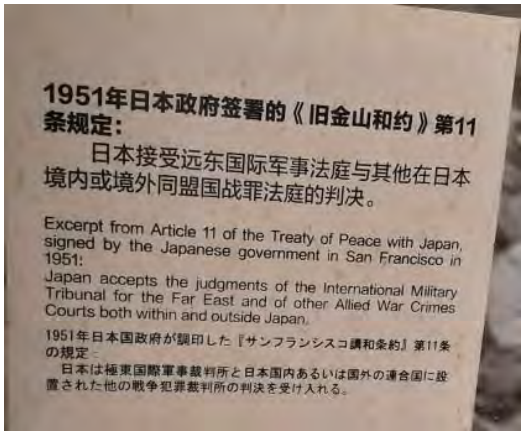




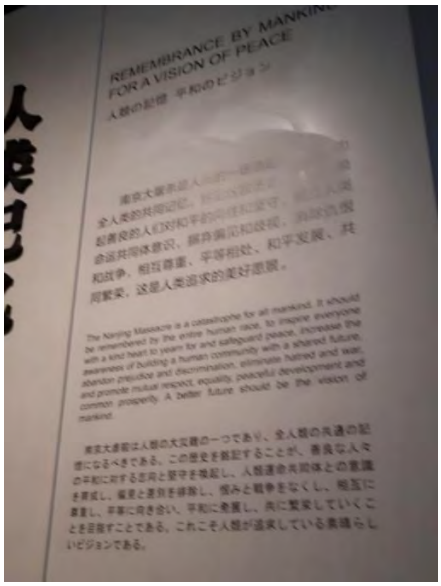
（↑写真左）「南京残虐行為」に関する極東国際軍事裁判の判決の抜粋：

日本軍占領後の最初の 6 週間で、20 万人以上の民間人と捕虜が南京とその周辺で虐殺された。この推定は誇張ではなく、埋葬団体やその他の組織によって提供された証拠によって裏付けられます。これらの組織は 155,000 人もの人々を埋葬しました。彼らはまた、犠牲者のほとんどが後ろ手に握られていたと報告した。そしてこの統計には、日本軍によって焼かれたり、長江に投げ込まれたり、その他の方法で処分された死体は含まれていない。

戦犯谷久雄の判決文の抜粋：中国門の外の花廟、塔橋、石観音、下関曹渓峡などの場所で、捕虜となった単耀亭ら 19 万人以上の兵士や民間人が日本軍の機関銃で虐殺され、遺体は痕跡を消すために焼かれた。さらに虐殺も散発的に発生し、15 万体以上の遺体が慈善団体に収集された。犠牲者の総数は 30 万人以上に達した。（↑写真右）



1951 年日本国政府が調印した『サンフランシスコ講和条約』第 11 条の規定:
日本は極東国際軍事裁判所と日本国内あるいは国外の連合国に設置された他の戦争犯罪裁判所の判決を受け入れる。



人類の記憶 平和のビジョン

「南京大虐殺は人類の大災難の一つであり、全人類の共通の記憶になるべきである。この歴史を銘記することが、善良な人々の平和に対する志向と堅守を喚起し、人類運命共同体との意識を育成し、偏見と差別を排除し、恨みと戦争をなくし、相互に尊重し、平等に向き合い、平和に発展し、共に繁栄していくことを目指すことである。これこそ人類が追求している素晴らしいビジョンである。」と記されている。

2003 年 3 月 20 日

南京虐殺の生存者の李秀英さんは生徒たちに自分の被害体験について語った。

当時妊娠 7 ヵ月の時日本兵に襲われ、抵抗したために顔･足･腹など 30 か所以上も刺され、仮死状態になった。鼓楼病院に運ばれ米人医師のウィルソン氏の手当てを受け、自分のいのちは辛うじて助かったもののお腹の赤ちゃんは流産してしまった。

公祭や記念行事で次の時代を担う若者たちに向けて、事実や歴史は記録するべきだけど、恨みは残してはいけないと、戦争を体験したからこそ永久の平和を求める大切さを語られた。

「歴史をしっかり銘記しなければならないが、恨みは記憶すべきではない。」

救助の様子は、マギー牧師の撮影により保存されている。

李秀英さんの説明を受けながら
自分がもし同じ立場だったら…と思ったとき、
同じように語ることができただろうか…
こんな残虐なことをされて、恨みを残さないと、
次世代につなげるだろうか…
そして、日本人として、申し訳ない気持ちもいっぱいでたまらず、また、どれだけ辛いか、言葉にすることもできない心境であるだろうけれど、その辛さを恨みでなく平和のために声をあげられている姿を目の前にして、涙が止まらなくなった。

気を取り直して…
戦争の悲惨さを、世界中でこれ以上経験することのないように、私も多くの人に伝え、次世代に繋げなければならないと思った。

1979 年 1 月

アメリカ　カーターが大統領在任中に中国と国交を樹立。

1987 年　イギリス連邦の訪中代表団は南京虐殺の犠牲者に敬意を表するために記念館を訪れた。

1994 年　土井たか子元日本社会党委員長・衆議院議長が南京事件の犠牲者に献花。

1994 年以来、南京では毎年 12 月 13 日に虐殺の犠牲者を追悼する式典が開催され、サイレンを鳴らし、平和のハトを放ち、歴史を忘れないよう人々に警告してきた。

南京の医療従事者がろうそくを手に犠牲者を悼み、フランス、日本、その他の国々から宗教者らが記念館を訪れ、祈りの儀式を行った。

中国と日本の僧侶は毎年、南京事件の犠牲者のために平和を祈る宗教儀式を行っている。

以降、主要人たちが記念館を訪問した。

1995 年９月　イスラエル国会代表団

1996 年９月　ジェームズ・シュレジンジャー元米国国防長官は記念館を訪れ、メッセージを残した。

「これは衝撃的で、十分に証拠が残されており、教育的に非常に重要な悲劇的な歴史的出来事です。」

1998 年５月　オーストラリアのマーガレット・リード元上院議長

1998 年５月　村山富市元首相とその代表団

2001 年８月　海部俊樹元首相とその代表団が記念館を訪れ、碑文を書いた。

2001 年 10 月　韓国のカン・ヨンフン元首相とその代表団

2003 年 ９ 月　ドイツのヨハネス・ラウ大統領は、ラーベ氏に保護された南京虐殺生存者二人と面会。

2007 年６月　コスタリカ共和国は中国と国交樹立。（当時アリアス大統領、ノーベル平和賞受賞者）

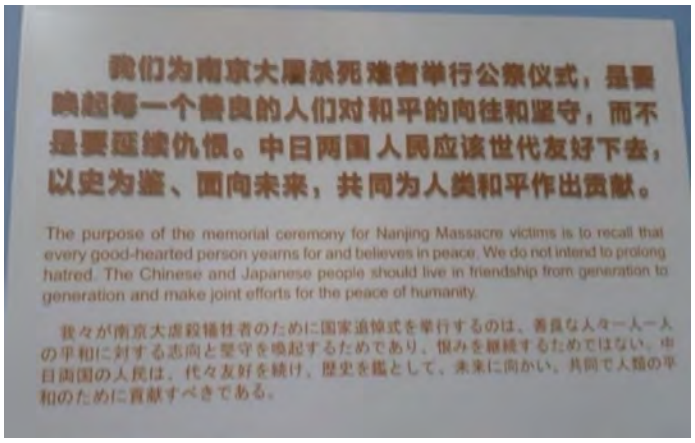
2013 年１月　鳩山由紀夫元首相

2014 年４月　デンマーク女王のマルグレーテ２世とその代表団（上の写真）

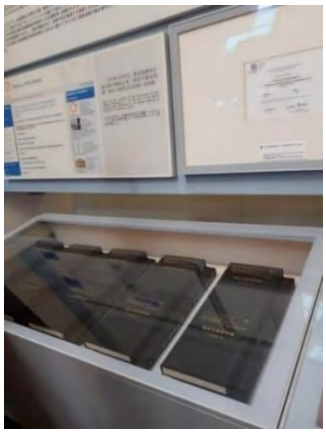
2017 年５月　チェコのゼマン大統領

2018 年６月　福田康夫元首相

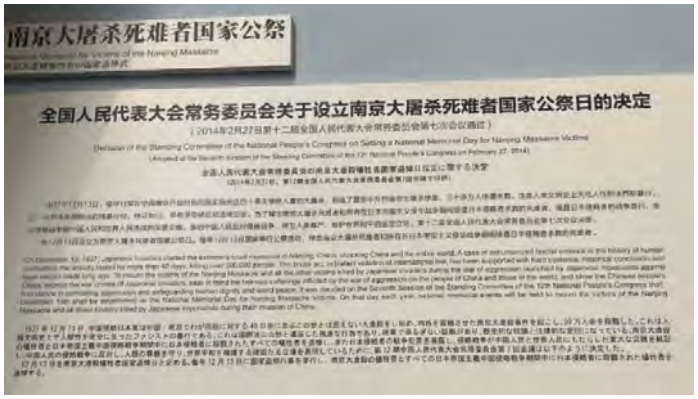
等々…



「我々が南京大虐殺犠牲者のために国家追悼式を挙行するのは、善良な人々一人一人の平和に対する志向と堅守を喚起するためであり、恨みを継続するためではない。中日両国の人民は、代々友好を続け、歴史を鑑として、未来に向かい、共同で人類の平和のために貢献すべきである。」ことを示す。



2015年10月９日←ユネスコの公式ウェブサイトは、「南京虐殺資料館」が「世界記憶遺産」に登録されたと発表した。



国立南京虐殺犠牲者記念碑に記されている↑

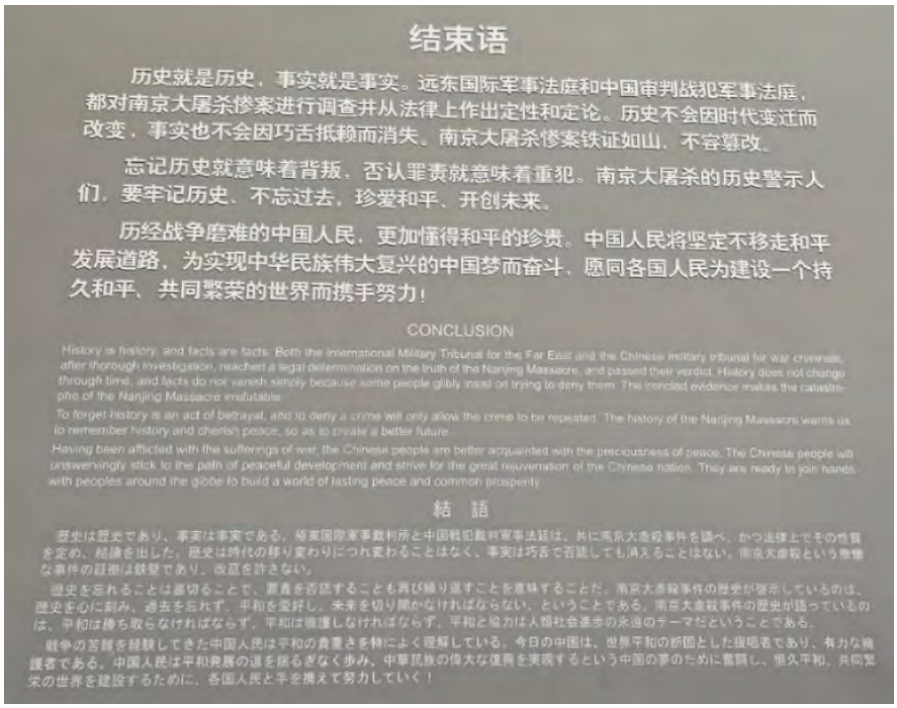
全国人民代表大会常務委員会、南京虐殺犠牲者に対する国家追悼日の制定を決定

（2014 年２月 27 日、第 12 期全国人民代表大会常務委員会第７回会議で採択）

1937 年 12 月 13 日、中国侵略日本軍は中国・南京でわが同胞に対する 40 日余に及ぶこの世とは思えない大虐殺をし始め、内外を震撼させた南京大虐殺事件を起こし、30 万人余を殺戮した。これは人類文明史上で人間性を完全に失ったファシストの暴行である。これは国際法に公然と違反した残虐な行為であり、確実で揺るぎない証拠があり、歴史的な結論と法律的な定説になっている。

南京大虐殺の犠牲者と日本帝国主義中国侵略戦争期間中に日本侵略者に殺されたすべての犠牲者を追悼し、また日本侵略者の戦争犯罪を暴露し、侵略戦争が中国人民と世界人民にもたらした重大な災難を銘記 し、中国人民の侵略戦争に反対し、人類の尊厳を守り、世界平和を擁護する確固たる立場を表明しているために、第 12 期全国人民代表大会常務委員会第７回会議は以下のように決定した。

12 月 13 日を南京大虐殺犠牲者国家追悼日と定める。毎年 12 月 13 日に国家追悼行事を挙行し、南京大虐殺の犠牲者とすべての日本帝国主義中国侵略戦争期間中に日本侵略者に殺戮された犠牲者を追悼する。



结束语

历史就是历史，事实就是事实。远东国际军事法庭和中国审判战犯军事法庭，都对南京大屠杀惨案进行调查并从法律上作出定性和定论。历史不会因时代变迁而改变，事实也不会因巧舌抵赖而消失。南京大屠杀惨案铁证如山，不容篡改。

忘记历史就意味着背叛，否认罪责就意味着重犯。南京大屠杀的历史警示人们，要牢记历史、不忘过去，珍爱和平、开创未来。

历经战争磨难的中国人民，更加懂得和平的珍贵。中国人民将坚定不移走和平发展道路，为实现中华民族伟大复兴的中国梦而奋斗，愿同各国人民为建设一个持久和平、共同繁荣的世界而携手努力！

CONCLUSION

History is history, and facts are facts. Both the International Military Tribunal for the Far East and the Chinese military tribunal for war criminals, after thorough investigation, reached a legal determination on the truth of the Nanjing Massacre, and passed their verdict. History does not change through time, and facts do not vanish simply because some people glibly insist on trying to deny them. The ironclad evidence makes the catastrophe of the Nanjing Massacre irrefutable.

To forget history is an act of betrayal, and to deny a crime will only allow the crime to be repeated. The history of the Nanjing Massacre warns us to remember history and cherish peace, so as to create a better future.

Having been afflicted with the sufferings of war, the Chinese people are better acquainted with the preciousness of peace. The Chinese people will unswervingly stick to the path of peaceful development and strive for the great rejuvenation of the Chinese nation. They are ready to join hands with peoples around the globe to build a world of lasting peace and common prosperity.

結　語

歴史は歴史であり、事実は事実である。極東国際軍事裁判所と中国戦犯裁判軍事法廷は、共に南京大虐殺事件を調べ、かつ法律上でその性質を定め、結論を出した。歴史は時代の移り変わりにつれ変わることはなく、事実は巧舌で否認しても消えることはない。南京大虐殺という無残な事件の証拠は鉄壁であり、改竄を許さない。

歴史を忘れることは裏切りことで、罪責を否認することも再び繰り返すことを意味することだ。南京大虐殺事件の歴史が掲示しているのは、歴史を心に刻み、過去を忘れず、平和を愛好し、未来を切り開かなければならない、ということである。南京大虐殺事件の歴史が語っているのは、平和は勝ち取らなければならず、平和は擁護しなければならず、平和と協力は人類社会進歩の永遠のテーマだということである。

戦争の苦難を経験してきた中国人民は平和の貴重さを特によく理解している。今日の中国は、世界平和の断固とした提唱者であり、有力な擁護者である。中国人民は平和発展の道を揺るぎなく歩み、中華民族の偉大な復興を実現するという中国の夢のために奮闘し、恒久平和、共同繁栄の世界を建設するために、各国人民と手を携えて努力していく！

結語

「歴史は歴史であり、事実は事実である。極東国際軍事法廷と中国戦犯軍事法廷は、共に南京大虐殺事件を調べ、かつ法律上でその性質を定め、結論を出した。歴史は時代の移り変わりにつれ変わることなく、事実は巧舌で消えることはない。南京大虐殺という無残な事件の証拠は鉄壁であり、改ざんを許さない。

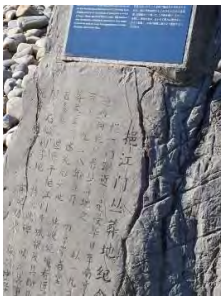
歴史を忘れることは裏切ることで、罪責を否認することも再び繰り返すことを意味することだ。南京大虐殺の歴史が掲示しているのは、歴史を心に刻み、過去を忘れず、平和を愛好し、未来を切り開かなければならない、ということである。南京大虐殺事件の歴史が語っているのは、平和は勝ち取らなければならず、平和は擁護しなければならず、平和と協力は人類社会進歩の永遠のテーマだということである。

戦争の苦難を経験してきた中国人民は平和の貴重さを特によく理解している。今日の中国は、世界平和の断固とした提唱者であり、有力な擁護者である。中国人民は平和発展の道を揺るぎなく歩み、中華民族の偉大な復興を実現するという中国の夢のために奮闘し、恒久平和、共同繁栄の世界を構築するために、各国人民と手を携えて努力していく！」

大虐殺に関する資料等の展示を見た後は気持ちが落ち込むので、最後には見学した方などの平和を想う気持ちが描かれた明るくきれいな色調の作品が展示されている。

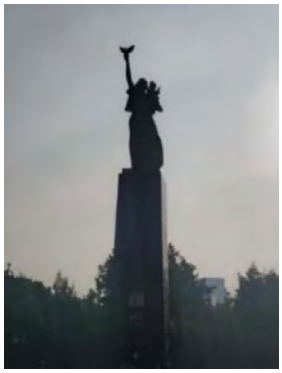
広大な複合施設は記念墓地のスタイルで設計されている。広場は石畳で舗装され、草が生えておらず、山積みの骨と死を象徴し、両側の緑の芝生と中庭の壁の外側の常緑樹は生命力と闘争の精神を象徴して、生と死のテーマを体現。敷地の中庭には、石畳、壊れた壁、壁に埋め込まれた「災害」「虐殺」「追悼」と名付けられた 3 つの大きなレリーフ、同胞犠牲者追悼碑、犠牲者リストの壁、犠牲者の遺骨、そして「集団墓地」の場所が一体となって墓地の広場を形成し、荒涼とした凍りついた情景を映し出している。

↑大きなレリーフ



↑同胞犠牲者追悼碑↑

←犠牲者リストの壁は、犠牲者名簿が記された壁は長さ 43 メートル、高さ 3.5 メートルで、「嘆きの壁」と呼ばれている。30 万人以上の犠牲者を代表する、南京事件の犠牲者 1 万人以上のリストが刻まれている。



平和の女神象
子どもを抱き、高く上げた手にはハトがいる姿。
遠くからもその姿が見える。

日中協会は 1986 年以来、日本国民の代表として過去の侵略戦争への反省と平和への切望を緑化と植樹という形で表現するため、植樹団体を組織して南京を毎年訪れている。

侵略の歴史を反省し、平和のために真実を伝え続ける活動は、日本の友人であり、中日国交正常化に多大な貢献をした故岡崎嘉平太氏と菊池義隆氏によって始められた。三本の多行松は、植樹団体が南京に来た時に記念館に植えられ、各団体の植樹が続けられている。

←2013 年 1 月 17 日
記念館を訪問した鳩山由紀夫元首相が書いた「友愛和平」の碑文。
鳩山氏は、このイチョウに土を盛り、水をやった。

記念館の一角に「紫ハーブ園」があり、紫金草の花を持った少女の像がある。南京大屠殺遇難同胞記念館を、ぜひ視察したかったとの私の意向を知った芦さんが、この場所と少女像の由縁を教えてくださった。

2007 年に本館が増築された際、山口誠太郎さんの息子、山口裕さん（83）が日本中から 1000 万円（約 64 万元）を集めて寄付し、ここに紫ハーブ園を建設された。「日中両国の人々が共に平和を祈る象徴」となることを願われている。

紫色の花は中国語で「二月蘭」と呼ばれ、日本軍による南京での６週間の虐殺の後、翌年の春になっても荒れ果てた地で粘り強く花を咲かせていた。1939 年、日本陸軍衛生材料工場長（薬剤科少将）の山口誠太郎が南京の紫金山の麓からこの花の種を採取し、日本に持ち帰った。戦後、山口さんは戦争を振り返り、平和を祈り、家族と共に数十年に亘ってこの花の普及に努め、「紫金草」と名付けた。現在、紫金草は日本各地で咲き誇り、話題になり「平和の花」として知られる。その話が絵本「むらさき花だいこん」(紫金草物語)となり、また、平和を唱える合唱組曲が作られ、日本各地の民間合唱団に歌い継がれている。戦争は、勝っても負けても、多くの人のいのちを奪い、残し引き継ぐべき文化や歴史をズタズタにしてしまう。何より理性を無くし、環境も破壊してしまう悲劇でしかない。今回、記念館で見聞きしてきたことや日中両国をつなぐいのちの種と平和を祈る思いが詰まった物語の絵本、合唱組曲を通じてなど、日中友好の大切さを多くの人に伝えようと思った。

江蘇省人民代表大会常務委員会表敬

江蘇省人民代表大会常務委員会・江蘇省人民対外友好協会との意見交換 17：30～20：00

江蘇省人民代表大会 常務委員会 副主任：周 広智氏

江蘇省人民代表大会 民族宗教華僑外事委員会 副主任：王 華氏

江蘇省人民代表大会 常務委員会外事委員会弁公室 主任：張 宏氏

江蘇省人民政府外事弁公室 党組成員　江蘇省人民対外友好協会 副会長：銭 文華氏

江蘇省人民対外友好協会 副秘書長：陳 瑞氏

江蘇省人民対外友好協会 通訳：王 文斐氏

2024 年は全国人民代表大会創立 70 年。中国では、すべての権力は人民に属し、人民が国家権力を行使する機関は一院制議会の全国人民代表大会（全人代）および地方の各クラスの人民代表大会とされている。全国人民代表大会委員が 5 年ごとに選出され、北京の人民大会堂（天安門広場西側）で開催されている。5 年の間に慣例では 7 回の中央委員会全体会議が開催される。

党の大会は、中国共産党の最高意思決定機関。党大会に出席する代表は、各代表団(第 20 回党大会では、38 代表団)で選出。北京、上海、広東など省レベルの地方代表団（香港、マカオ、台湾以外の省レベルで 31)、香港、マカオの関係者、台湾本籍者の代表団、中央と国家機関、中央企業系統、中央金融系統、人民解放軍と武装警察などの代表団。

中央委員会の構成は、約 200 名の中央委員と約 160 名の中央候補委員で、党や国家の指導者はほとんどが中央委員。中央委員は会議に「出席」中央候補委員は「列席」（採択権は無い)。中央委員には、各地域や部門の指導者が選ばれる。基本的に各地域からは、党委員会書記と政府の首長(直轄市では市長、省では省長、民族自治区では政府主席)の 2 名ずつ、合計 60 数名が入る。

中国共産党第 17 回全国代表大会　2007 年 10 月 15～21 日　胡錦濤 総書記

大会テーマ「中国特色社会主義の偉大なる旗を高く掲げ、小康社会の全面建設に向け奮闘努力し、勝利しよう」

中国共産党中央委員会委員 204 名、中央委員候補 167 名、中国共産党中央規律検査委員会 127 名

全国党員数：7,336.3 万名（2007 年 6 月）　代表：2,213 名　特別代表：57 名

中国共産党第 18 回全国代表大会　2012 年 11 月 8～14 日　胡錦濤 総書記

大会テーマ:「中国の特色ある社会主義の道に沿って揺るぎなく前進し、ややゆとりある社会(小康社会)の、全面的建設のために奮闘しよう」「新指導部」の主要メンバー習近平らが、党中央委員に選出された。

全国党員数：8,260. 2 万名（2011 年 12 月）　代表：2,268 名　特別招請代表：57 名

中国共産党第 19 回全国代表大会　2017 年 10 月 18～24 日　習近平 党総書記

大会のテーマは「ややゆとりある社会(小康社会)の全面的完成の決戦に勝利し、新時代の中国の特色ある社会主義の偉大な勝利をかち取ろう」習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想を党規約に明記

全国党員数：8,944. 7 万名（2017 年 10 月）　代表：2,280 名　特別招請代表：74 名

中国共産党第 20 回全国代表大会　2022 年 10 月 16～22 日　習近平 党総書記　三期目を決める大会。

中国共産党中央委員会委員 205 名、中央委員候補 171 名

全国党員数：9,671.2 万名（2022 年 6 月）　代表：2,296 名

各省、自治区、直轄市、自治州、県、自治県、市、市管轄区、郷、民族郷、鎮に人民代表大会を設置し、県クラス以上の地方各クラスの人民代表大会は常務委員会を設置し、それぞれ憲法と法律の規定に基づい

て職権を行使するなどの役割があり、日本の地方自治体・議会にあたる。全人代と地方各クラスの人民代表大会の関係は、地方で決まった法規に関し、全人代常任委員会に、報告・認可を得・実施・記録などがあり、全人代へ列席して、意見発表・質問応答などをする。
中国共産党の最高指導部と言われるのは政治局常務委員会。政治局常務委員となる筆頭副総理を含め、4名の副総理がいる。国務院副総理は全員が政治局委員。中央政治局は概ね 25 名。2002 年以降、女性が必ず 1 名含まれ、福祉や文化など、暮らしに関わる部門を担当していたが、2022 年第 20 回大会では、候補者はいたが選出されなかった。
政治局委員には、重要な地方のトップとして 4 つの直轄市の党委員会書記と広州・深圳がある広東省党委員会書記が選出に含まれる。2002 年以降、新疆ウイグル自治区の党委員会書記も選出されている。湖北省党委員会書記や山東省党委員会書記は近年含まれなくなった。

70 年前、江蘇省は党の指導の下で初の全省普通選挙を実施し、各レベルの人民代表大会（人民の国家所有と地方政府）を設立。1979 年、地方人民代表大会常務委員会が設立。全国人民代表大会が 5 年ごとに開催され、江蘇省からも委員等が選出されている。

↓人民代表大会の会議場の中

↑敷地内の常任委員会の建物↑

常任委員会の応接室など見学をした。↑来客の予定があり、準備がされていた。大きな水墨画など飾られ、ガラスケースには、民芸品などがあり、日本の剣道の人形も飾られていて親しみを感じた。↓

←焼け野原となった南京のまちの航空写真が入口近くに飾ってあった。

↓西熊本県議と周副主任

江蘇省の各レベルの人民代表大会は、「中国の発展において先頭に立ち、模範を示す」と習近平総書記から使命と課題を受け、新たな道の継続と改善努力も柔軟にしながら、人民代表大会制度の運営と人民民主主義の発展をめざされている。江蘇省は、農業、手工業、資本主義工業と商業の世界に通じる変革を推進し、中国全体の発展に建国初期から寄与してきたとのこと。

北京同様にまちは緑が多く、国として大気汚染の改善のために計画的に緑を増やすことを決め、大気・水質の検査をしいてる。北京の大気はクリアだったが、南京はまだ少し霞んだ感じがした。人民代表大会常務委員会では、委員会として国の検査に間違いがないかチェックする機能をしっかり働かせていると話され、民主的な運営がされている一端がうかがえた。

視察全体を通じてスケールの大きさと集中的かつ極め細やかな取り組みが、本当に経済大国であると実感した。イメージしていた一昔前の中国とは違っていて、大気汚染などにも、力を入れ改善を図られていることが良くわかった。アジアでの協力関係は、経済力を落としている日本にとって大事なことだと考える。争うための準備ではなく平和のための交流で、友好関係を強固にすることが重要。二度と悲劇を起さない平和への想いを世界中で共に持つべきであると思う。